

『 在来野草による緑化ハンドブックー身近な自然の修復 』

根本正之・山田晋・田淵誠也 編集 朝倉書店出版

私が野川の外来植物駆除の活動をして以来ご指導いただいていた根本正之先生（現東京大学大学院農学生命科学研究科特任研究員・元東京農業大学教授）が、5月1日に、朝倉書店から根本正之他2名編集『在来野草による緑化ハンドブックー身近な自然の植生修復一』を出版されました。

根本先生は、まえがきには、「昔から普通に見られた在来植物の生態や取扱い（栽培）と、それらを構成員とする生態系のしくみを解説したテキストがなかった。・・・本書は身近な自然の植生を修復するうえで、普通の在来植物が演じる役割を解説したものである」と書かれています。

私が、根本先生から最初にこの本の出版のはなしをうかがった時は「日本らしい自然再生ハンドブック（改題）」でした。これから3年半ほどがたちましたが、ようやく日の目をみることになりました。私も、第4章の事例紹介では、「野川のフジバカマを育てる」と題して執筆しております。ご覧いただければ幸いです。

尚、朝倉書店のHPによりますと『公園・緑地・里山などへ在来野草を導入・維持し、半自然植生を修復・創成するための実践的ハンドブック。在来野草約70種の生理生態データと栽培データを中心に、在来野草利用の注意点や緑化実践事例を示す。カラー口絵には種子と芽生えの貴重な写真を収載。読者対象は緑地の管理に携わる団体および市民、自治体職員、教員など。〔内容〕日本の半自然植生／草本群落造成の基礎／在来野草の生態的特性と栽培・導入法／事例紹介〔収録種〕アマナ、イチリンソウ、ミツバツチグリ他』と紹介されております。A5版440頁で、価格（税込み）は10780円です。個人高くてなかなか買えません。可能なら、図書館、公民館などに一冊置いていただけると有難いです。

安達 榮一

事例

11

野川のフジバカマを育てる
—ゾーニングとその管理による保全活動—

[安達榮一]

● 1. 野川の自然環境

約5万年前に古多摩川が武蔵野台地を削ったことでできた崖（国分寺崖線）の湧水を集めて、野川は流れている。野川は東京都国分寺市にある（株）日立製作所中央研究所の庭園の大池に発し、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市、世田谷区を流れて、多摩川に合流する長さ約20kmの都市河川である。野川の中流域では都立武蔵野公園と都立野川公園の中を野川は流れていて、都市部にありながら、まだまだ豊かな自然が多く残されている。

「みたか野川の会」の調査では、ここで見られた植物約340種のうち外来種の割合は41%にのぼり、野川でも外来植物の侵入・定着が目立っている。特に、特定外来生物に指定されている植物12種のうち、この付近では、4種（アレチウリ、オオフサモ、オオキンケイギク、オオカワヂシャ）が定着している。また要注意外来生物のオオブタクサが繁茂し、特に目立つアレチウリとオオブタクサの駆除は大変やっかいで、景観を損なっている。

● 2. 活動のねらい

大きなねらいは、野川の自然を守ることであるが、まずは、着手小局で、目の前のねらいとして、野川のフジバカマの保全を掲げた。

フジバカマは「秋の七草」の一つで、『万葉集』にも登場しており、日本人には古くからよく親しまれている。河川の湿潤な場所に生育していたが、その数は、近年の都市開発や河川改修に伴い減少していて、環境省の第4次レッドリスト（平成27年改訂版）には、NT（準絶滅危惧）に指定されている。東京都のレッドリスト（2010年版）には、西多摩と南多摩ではCR（絶滅危惧IA類：近い将来においては野生では絶滅の危険性がきわめて高いもの）、北多摩と区部ではDD（情報不足：環境条件変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行しうる属性を有しているが、生息状況をはじめとしてランクを判定するに足る情報が得られていないもの）となっている。北多摩の野川にわずかに残っているフジバカマは、なんとか残していきたいというのがこの活動のねらいである。

このフジバカマを保護するためにも、また野川の在来植物を保護するためにも、まずは、侵略的な外来植物のアレチウリとオオブタクサを駆除・抑制することが前提になる。

筆者が代表をしていた「みたか野川の会」では、三鷹市内を流れる野川に繁茂する

侵略的な外来植物(アレチウリとオオブタクサ)の駆除活動を7年間(2008年~2014年)おこなった。この活動は、野川の河川管理者である東京都北多摩南部建設事務所から、外来生物法に基づく防除(駆除)の活動であることが認められ、アレチウリなどの除草ゴミの処分は都がおこなった。この外来植物駆除活動によって、一時期は三鷹地区の野川には、アレチウリやオオブタクサは、目立たなくなった。しかし、残念ながら「みたか野川の会」の活動は、その継続が困難となり野川は、またもとに戻りつつある。

2011年8月に東京大学特任研究員根本正之博士の指導で実施した環境講座「野川の外来植物について考える(全3回)」の初回の「野川のフィールドワーク」には42名が参加した。中には、行政に携わる者も数名いた。その意見交換の際には、「野川にまだフジバカマが残っていて、是非残したいものだ」と話し合った。しかしながら、そのときまでは、野川は東京都が年3回一斉の草刈りを実施しており、フジバカマは、生育しても花が咲く前に刈られてしまっていた。

3. 活動の内容

a. 野川のフジバカマゾーンの管理

野川を管理する東京都北多摩南部建設事務所と協議して、翌年の2012年からフジバカマ付近だけ草刈りをおこなわないことになった。フジバカマが比較的よく残っている野川の法面にフジバカマのためのゾーニングをおこなった。野川の高水敷と管理用通路の間の法面(護岸)のフジバカマの自生地に設定したフジバカマゾーン約120m²(幅約4m,長さ約30m)は、湿潤な環境ではあるが、法面内で、増水時にもぎりぎり冠水しない場所にある(写真1)。午前中は適度な日照があるが、午後は樹木の陰になり、木漏れ日程度しか日が当たらない場所である。苔こけがよく生育している。そして、そのゾーンは市民がフジバカマ以外の野草を除草・草刈りして、適切に管理することになっている。その結果、フジバカマは順調に成長して、2013年の秋には開花するに至った(写真2)。その後も順調に毎年開花している。フジバカマの草丈は、ゾーン内ではばらつくが、比較的よく育って

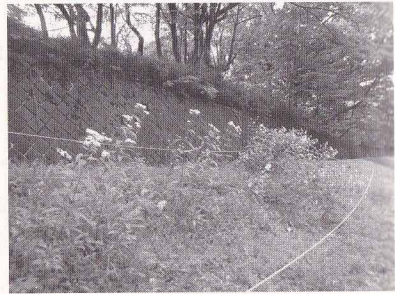


写真1 野川のフジバカマゾーン (2014年10月初旬, 筆者撮影)

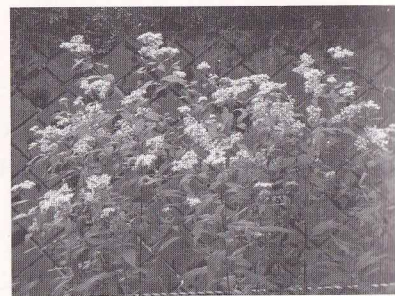


写真2 フジバカマ (開花時) (2014年9月末, 筆者撮影)

いるもので、9月下旬には約160 cmになる。花期は、9月中旬から10月上旬である。

b. 苗を育て、ほかの場所にも植栽

野川で採取したフジバカマの種子を自宅でセルポットに播いて、毎年数10株の苗を育てては、野川や近くの公園、庭園や花壇に植栽して、少しでも多くの人に親んでもらえるように努力をしている。フジバカマの苗の育て方は、11月に、セルポットに市販の種播き用の土を入れ、そこにピンセットで各セルに種子を播き、毎日1回灌水をして、12日から20日ほどたつと、発芽し双葉が出てくる(写真3)。その後、根が張ってくれば、直径10 cmほどのポットに植えかえる。その際の土は、やはり市販の花用の培養土を使っている。

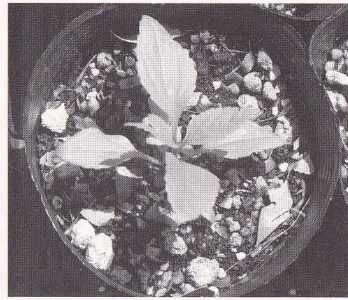


写真3 フジバカマの苗 (2014年4月中旬, 筆者撮影)

これまでに、地域のコミュニティセンター(大沢コミュニティ・センター)の花壇、三鷹市星と森と絵本の家(国立天文台構内)の花壇、野川の源泉である大池じんたいの日立中央研究所の庭園、野川公園や神代植物公園植物多様性センターなどに苗を定植した。自生地と似たような環境でないと、生育はあまりうまくいかなかった。上記の中で、日立中央研究所の庭園は、湧水の流れる小川の近くに植栽でき、最も自生地に近い環境であったため、順調に生育した(写真4)。たいていは毎年花を咲かせるほどの順調な状況はなかなか保てていない。湿潤なことが最低の条件と考えられるが、灌水をただけでは、必ずしもうまく生育しない場合がある。よくつる性植物がフジバカマに絡んでくるが、気がついたときにすべて取り除いている。また、東京都の草刈りで長年厳しい状況におかれてきた野川のフジバカマゾーンにも、フジバカマの群落がよく育つようにと、毎年少しずつ苗を植栽している。これまでに55株を植栽した。

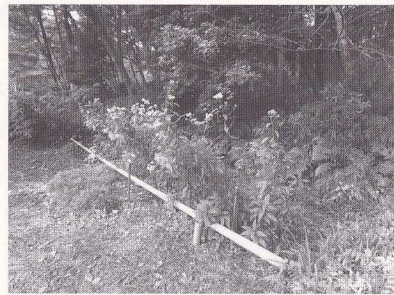


写真4 日立中央研究所庭園のフジバカマ (2014年9月末, 筆者撮影)

c. フジバカマに来るアサギマダラの観察

野川のフジバカマゾーンで吸蜜に訪れるアサギマダラを、これまで、秋の花の季節に3度(2012年, 2013年, 2015年)確認した(写真5)。アサギマダラは海を渡って、2000 kmも旅をするめずらしい蝶である。野川は移動ルートからははずれているようだが、それでも少数が、野川のフジバカマに飛来する。アサギマダラとの出会いは、

活動をするうえで大きな励みである。

d. レッドリストへの情報提供と植物標本の作成

東京都環境局自然環境部計画課には、「東京都の保護上主要な野生生物種」情報記入シートがあり、野川のフジバカマの情報も、それに記入して提出した。次回の東京都のレッドリストの改訂時には、野川のフジバカマの情報が、役に立つことだろう。

また、フジバカマの植物標本を作製して、首都大学東京（現 東京都立大学）の牧野標本館に寄贈し、植物標本として保管している。

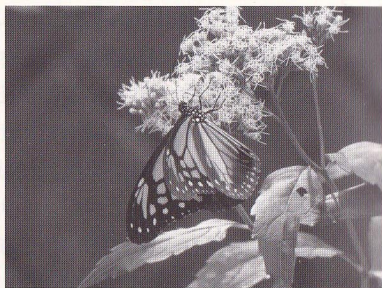


写真5 フジバカマにきたアサギマダラ
(2015年9月末、筆者撮影)

● 4. 今後の展望と課題

現在は筆者が細々とこの活動を続けているが、活動をしっかりと引き継いでくれる人が現れることを願っている。

また、野川の水辺のフジバカマを守るのは、河川管理者の東京都北多摩南部建設事務所と協力して活動していくことが必要である。東京都では、定期的な人事異動があり、担当者が変わる。そのため筆者は、東京都の野川流域連絡会の委員をしながら、東京都との関係を保つ努力をしている。